『南総里見八犬伝』の長編構想

――「勧善懲悪」をモチーフとする小物語の反復と連鎖――

金　学　淳

はじめに

馬琴の『南総里見八犬伝』（以下『八犬伝』と略称する）は文化十一年（一八一四）から天保十三年（一八四二）までの二十八年間にわたって執筆された全九十八巻一〇六冊に及ぶ長編作品である。従来本作品のような読本は「因果応報観」、「勧善懲悪」の思想を持つジャンルであるといわれている。散文のジャンルと儒教道徳の結びつきが近世の散文文学にも大きな影響を及ぼしていることはいうまでもない。近代に入って坪内逍遥による『八犬伝』の「勧善懲悪」に対する批判が近代文学の始発となってからは、馬琴作品の「勧善懲悪」は朱子学の理論というよりも、江戸時代の封建イデオロギーを代弁する思想として認識され、前近代性の典型として批判されるようになった。だが、「勧善懲悪」をただ前近代的な思想としてのみ捉えることは正しいのであろうか。前近代の文学の本質にかかわる別の意味はもっていなかったのか。その疑問に本論文の関心がある。

本稿では既成概念となっている「勧善懲悪」と馬琴の読本の関係を道徳的あるいは封建的イデオロギーの枠組みの中でとらえるという通念を打破したい。馬琴はけっして道学先生でも、儒教イデオロギーの権化などでもない。壮大なロマンとしての物語の作者ととらえるのが本論文の立場である。ここでは『八犬伝』の長編性を、商品としての読本、購読者・作者という相関のなかで、単位的（小物語）筋立の反復と連鎖にとらえることが可能ではないかと考える。その反復と連鎖を検証しようとするものである。

『八犬伝』における「勧善懲悪」は、江戸の人々の行動と精神を規制あるいは束縛した倫理・道徳としてのみ捉えるべきものではない。それは当代の文学が、印刷出版による大量の供給・流通商品・板元と貸本屋の存在・購読者の拡大といった文学をめぐる〈外部〉の文化・経済・流通の変化に対応するためのものであった。近世的な文化産業の変化が馬琴読本の成立、その内容に大きく影響した。教化・教訓のための儒学の倫理・道徳としてではなく、近世の「文化商品」としてのありかたと結びついた機能をもつ「勧善懲悪」、それを本稿は長編構想のための一つのモチーフとして考えてみようと思う。これまでの様々な先行研究の中でも、このような認識を出発点とし、「勧善懲悪」を作品生成の論理として論じた研究は行われていた。しかし近世の文化商品としての読本の機能としての「勧善懲悪」のモチーフを実証的な作品内容に沿うかたちで分析したものは見当たらない。それゆえここでは作品のテクスト分析から「勧善懲悪」が長編構想の一つのモチーフとして利用されていることを析出することを試みる。

一　近代の「勧善懲悪」に対する批判――坪内逍遥の『小説神髄』

このような考え方で話を進めるために、近代の坪内逍遥による馬琴批判の根拠となった勧善懲悪論は乗り越えなくてはならないきわめて大きな障害である。逍遥が馬琴読本の「勧善懲悪」をどのように考えていたのかを、まず検討する必要があろう。

「勧善懲悪」とは、文字通りに善（善行）を勧め、悪（悪行）を懲らしめることである。江戸の儒学思想に沿う論理であるが、読本などにとって重要なことは中国白話小説の輸入に伴って近世の文学論の用語として確立されたといわれていることである。こうして「勧善懲悪」という概念は思想という枠組みを超えて文学自体を包括し、限定してしまってさえいた。それに対して中村幸彦は「馬琴の小説観は、勧善懲悪的と、なお称すべきであるが、幕初の林羅山を初め朱子学者達が唱えた勧善懲悪的文学観とは、異質的なものである。朱子学者達の前述した文学と思想の包摂関係において、思想が文学をつつむ形である。それと反対の馬琴の説は、時間的な歴史の通りに、近代的な形態と判断してよいのである。が従来、坪内逍遥の小説神髄以来、馬琴の説も、幕初の朱子学者風に考えられて来ている。逍遥はまだも留意して検討しているが、それから後々の人は、簡単に朱子学者風に割切っている[1]」と、朱子学の思想的な「勧善懲悪」と、馬琴の文学におの

けるその概念の意味がかなり異なることを指摘しているが、ここではそれが近世と近代の文学を区別する思想として存在したことに着目している。

江戸後期は寛政改革の出版統制によって異学、洒落本などが禁止され、山東京伝、蔦屋重三郎などは手錠の処罰をうけることになった。この社会状況の下で作家達が幕府の出版統制に従うためにも功利的な「勧善懲悪」はかなり利用しやすかったのであろう。このような「勧善懲悪」は近代に入ってから坪内逍遥の『小説神髄』の中で批判を受け、リアリズム主義文学を確立するための攻撃対象になった。青木稔弥によると、「『小説神髄』初版の発行部数は三百部程度で、当初の実際の影響は、西洋の文学に傾倒する一握りの若い層にとどまり、娯楽読み物を求めた人々の間での馬琴人気がコンスタントに保たれていたというのも、これまた事実である」[2]と、『小説神髄』が刊行された時期、一般の人々が馬琴人気に圧倒されたことを述べている。『小説神髄』が出版された明治十八年（一八八五）・十九年（一八八六）において、馬琴小説の影響が相当大きかったことがわかる。これは近代文学を近世文学の旧習から断絶して出発することを提唱した逍遥が馬琴の存在をかなり意識していたことを意味するものである。

近世文学研究者である中野三敏は「特に馬琴を代表とした戯作文壇の旧弊を批判して、戯作者流の稗史小説の卑小さから脱出し、西欧近代の小説観・小説作法に依拠しつつ、近代文学としての装いを凝らすことを主張したものと考えるばかりであった。……右のような理解は、かなりな部分、特に馬琴批判という辺りで、明白な誤解をしていたらしいことにも気がついたし、また、逍遥の意図の一つというべきは「新しい小説」の称揚という如き大上段の問題意識というより、所謂戯作的な稗史小説といえども、自然の人情を描写する限りにおいては立派な美術であり、……何よりも逍遥自身に即してそれを考えるのであれば、従来のように専ら近代側から振りかえるのではなく、寧ろ江戸の側から眺めてみることが必要なのではないか」[3]と近代の馬琴認識が誤解にもとづくと論じている。中野の近代の〈知〉の批判は江戸時代の前近代性として単純に「勧善懲悪」を批判の対象にとどめるのではなく、作品の内部に潜められたそれの意味を探る必要があるという近世文学者の努力をも促しているといえよう。

逍遥は馬琴小説のどのような要素を批判したのであろうか。大きな批判の対象になった「勧善懲悪」の概念をどのように捉えていたのかを考察してみよう。

『小説神髄』は最初九分冊であったのを明治十九年（一八八六）の五月から上・下巻の二冊で合本・発行し、上巻には

文学理論、下巻には方法論が書かれている。上巻の内容は「緒言」、「小説総論」、「小説の変遷」、「小説の主眼」、「小説の種類」、「小説の裨益」であり、下巻の内容は「小説法則総論」、「文体論」、「脚色の法則」、「時代小説の脚色」、「主人公の設置」、「叙事法」で構成されている。次は緒言の一部分である。

戯作者流はひたすら李笠の語を師として意を勧懲に発するをば小説、稗史の主脳とこゝろえ、道徳という模型を造りて力めて脚色を其内にて工夫なさまく欲するからに、強ち古人の糟粕をば嘗めむとするにはあらざめれど、もと其範囲広からねば、覚えず同轍同趣向の稗史をものするものなるべし。是れ豈に遺憾ならざらむや。……古来我が国のならはしとして、小説をもて教育の一方便のやうに思ひて、しきりに奨誡勧善をば其主眼なりと唱へながら、なほ実際の場合に於てはひたすら殺伐惨酷なる、若しくは頗る猥褻なる物語をのみめでよろこび、他のかたくるしき筋の事は目を佳めてだに見る人稀れなり。[4]

この緒言では従来の「小説、稗史」が重要な「意」（モチーフ）として「勧懲」、「奨誡勧善」を「主脳」（「主眼」）にしてきたといい、それが「教育の一方便」のための「道徳」であるのを「遺憾」に思っているという。逍遥のいう教育を目的とした「勧善懲悪」は、実は明治期の近代国家の教育方針だったことに注意しておきたい。つまり逍遥は馬琴批判をとおして当代の頑なな教育方針を批判しているともいえる。それゆえに、「然して小説家が教導の目的とする所は通常勧善懲悪を旨とするなるが、実に此目的并に其他の主旨も亦此術の進歩に因て愈々高上に達するを得べきなり[5]」と、小説には勧善懲悪以外の道徳（倫理）も存在するということを主張している。勧善懲悪以外に小説が内容とすべき第一のものとして「人情」をあげている。「小説の主脳は人情なり、世態風俗これに次ぐ」。また、善悪でもって人間の感情を表し、小説の価値判断を支配することを拒み、「ありのまゝに摸写する」ことを最も大切なこととしており（表現の第一とする）、小説作家は人間世態をそのまま描きながらそれに生起する感情を表現すべきであると論じている。「勧善懲悪」が「戯作」（小説）の主題や人間の内面をも律しているという指摘には注意しておきたい。というのは、その指摘が次に引用する馬琴の『八犬伝』から導き出されているからである。次は逍遥が勧懲小説の結晶体とみなしている『八犬伝』に対する記述である。

・勧懲小説は物語をもて本尊とし、勧懲をもて粧飾とせり。……若し勧懲の小説にして其本尊たる物語に咄々奇怪の脚色ありなば、勧懲の主旨は通ずるとも、之れを巧妙の小説とは決して称へがたかるべし。我が東洋の勧懲作者は此変遷の次第を知らねば、ひたすら勧善懲悪をば小説、稗史の主眼とこゝろえ、彼の本尊たる人情をば疎漏に写すはをかしからずや。[15]

・彼の曲亭の傑作なりける『八犬伝』中の八士の如きは、仁義八行の化物にて、決して人間とはいひ難かり。作者の本意も、もとよりして、彼の八行を人に擬して小説をなすべき心得なるから、あくまで八士の行をば完全無缺の者として、勧懲の意を寓せしなり。されば勧懲を主眼として『八犬伝』を評するときには、東西古今に其類なき好稗史なりといふべけれど、他の人情を主脳として此物語を論ひなば、瑕なき玉とは称へがたし。[16]

このように逍遙は、世態人情のありのままの写実を疎外して「勧善懲悪」が主題・人間に深く浸潤している勧懲小説を批判し、馬琴の『八犬伝』をそうした小説の代表的なものとして見ていることがわかろう。逍遙は、『八犬伝』では「勧善懲悪」が主題として作品全体を貫いており、物語の筋は「人情」より「勧善懲悪」の道徳を柱とし、物語はこの道徳の器となっているとしている。『八犬伝』の主人公達である八犬士を「八士の如きは、仁義八行の化物」と呼び、「勧善懲悪」が人格化された登場人物だとさえいっている。「勧善懲悪」は物語全体を貫く主題であるのみならず、人物造型を規定する規範としても働いているとまで言い切っている。こうして『八犬伝』は「瑕なき玉とは称へがたし」とその価値を否定され、この考えが『八犬伝』の評価として以後の文学史を貫いていくことになる。だが、はたしてそうであろうか。馬琴の「勧善懲悪」はもっと別のところに働いているのではないか、本稿ではそのような疑問をもとに論述を始めていく。

二　読み切り形式と「勧善懲悪」

『八犬伝』が出版された刊行年と出版形式をみると、

・文化十一年（一八一四）肇輯五冊第十回
・文化十三年（一八一六）第二輯五冊第十回
・文政二年（一八一九）第三輯五冊第十回
・文政三年（一八二〇）第四輯五冊第十回
・文政六年（一八二三）第五輯五冊第十回
・文政十年（一八二七）第六輯六冊第十一回
・文政十二年（一八二九）第七輯上帙四冊第八回
・文政十三年（一八三十）第七輯下帙三冊第四回
・天保三年（一八三二）第八輯上帙五冊第九回
・天保四年（一八三三）第八輯下帙五冊第九回
・天保六年（一八三五）第九輯上帙六冊第十二回
・天保七年（一八三六）第九輯中帙七冊十二回
・天保八年（一八三七）第九輯下帙上五冊第十回
・天保九年（一八三八）第九輯下帙中五冊第十回
・天保十年（一八三九）第九輯下帙之下甲号五冊第十回
・天保十一年（一八四〇）第九輯下帙之下乙号上套四冊第八回、中套五冊第八回
・天保十二年（一八四一）第九輯下帙下編上五冊第六回、中五冊第十回
・天保十三年（一八四二）第九輯下帙下編之下五冊第六回、第九輯下帙下結局編五冊第七回

とある。一年から三年置きに五冊十回程度の分量が通常的な形式であるのがわかる。天保十一年から十三年までは年二回、前の形態通り刊行されている。一、二回一冊の基本形式から十回五冊分程度が一回分の出版形態であったのが見てとれる。また、馬琴は白話小説から取り入れた「章、回」形式を「輯、冊（巻）、帙、号、套、回」まで細分化している。この読

み切り形式は第一に作品の構成及び構造にも深く関連している。つまり一回分のストーリーはそれ自体で完結する小物語であることが要求されるということである。ここでなぜそうなったのかを考える必要がある。それは販売方法と結びついた近世の商品経済の法則に従うものだったろう。すなわち、購読者に買える（あるいは貸本代としてふさわしい）値段に応じた分量はその程度だったということである。したがってこのように分冊される場合、購読者の興味を継続させていく趣向が求められたにちがいあるまい。本稿では「勧善懲悪」のモチーフとその構成、構造はこの読本の販売方法、つまり、商品経済と深く結びついていることを明らかにする。この要求にこたえるために馬琴は様々な構想や仕掛けを利用しているが、ここではそれを「勧善懲悪」を中心にして考えていく。

『八犬伝』肇輯五巻十回の終わりに作者は次にように述べている。

さは巻数に定めあり、また張数にも限りあり。毎編これを過すときは、売買に便宜ならずといふ、書肆が好み推辞がたし。よりて余稿は巻を更て、明年かならず嗣出さん。大約こゝに演る所は、この小説の発端のみ。これより下は八犬士の、やゝ世に出べき事に及べり。この後又年を歴て、八子八方に出生し、聚散時あり、約束ありて、竟の里見の家臣となる、八人の列伝は、前後あり長短あるべし。まだ其処までは攷果さず、年をかさね、巻をかさねて、全本となさん事、曩に予が著したる、弓張月の如くなるべし。閲者幸に察せよ。

ここからは次の三つの本作品の構想が見てとれる。

一、書物を売買の対象たる商品として念頭に入れている。そのため書肆（板元、貸本屋など）が書物出版・流通に深く関連し影響をあたえている。

二、白話小説『水滸伝』から影響を認めていて、作品全体の構想が八人（八犬士）の列伝を中心にすること。『水滸伝』では、重要人物一〇八人の列伝が並べられており、本作品もそれを模倣している。

三、「年をかさね、巻をかさねて、全本となさん事」というところから、最初から全体的な企画を考えていなかったことがわかる。それぞれの巻毎に注文分の原稿を執筆し、回が重なるうちに長編物になったのが『八犬伝』の完成本である。

この三つのなかで、本稿では三の部分にもっとも注目したいと考える。作品が執筆されるためには、まず書肆からの依頼が必要である。毎回、板元・貸本屋などの出版組織からその依頼があり、注文された分だけの原稿を執筆すると、それが出版された。したがって馬琴の原稿も注文のたびごとにその回の構想が考えられていたと思われる。注文による執筆であったことは読本の執筆が商品経済に巻き込まれていたということを意味する。依頼されて書かれた作品が読者の好評を得ると、次の原稿が依頼される。それが繰り返されてストーリーが展開する。つまり、一回に出す分量で、読者の興味をかき立て、そして興味をつなげていくことが要請されるということである。

現在、完成本として見る『八犬伝』はこのように一回分の作品が購読者の人気を得、好評の後にその続きを刊行していくうちに長編小説となったものである。したがって一回一回の物語は幅広い読者層を掘り起こす必要があったことから、高い教養をもつ知識人だけではなく、知的水準の浅い読者もついていけるように、固定されたパターンをもっていたと思われる。すなわち『八犬伝』を長い間、読者に興味を与えながら人気を維持するために、おそらく前代にはない何らかの技法と新たな構想が生み出されていたはずである。それはけっして単一のものではなく、網のように様々な要素が絡んでいたことであろう。本稿ではそのなかで、近代に入ってからもっとも批判の対象になった「勧善懲悪」という概念（モチーフ）に注目して考えてみたい。

『八犬伝』の肇輯、第二輯には多様な悪人が登場しているものの、「勧善懲悪」に関連する言葉は意外にもほとんど見当たらない。第三輯の序に初めて「勧善懲悪」と関係のある記述がみられる。

昔者震旦有鳥髪善智識。推因弁果。誘衆生以俗談。醒之以勧懲。其意精巧。其文奇絶。乃方便為経。寓言為緯。是以其美如錦繡。其甘如飴蜜。蒙昧蟻附不能去焉。既而所有之煩悩。化為屎溺。遂解説糞門。則不覚到奨善之域暫時為無垢之人云。不亦奇乎哉。余自少愆事戯墨。然狗才追馬尾。老於閻巷。唯於其勧懲。毎編不譲古人。敢欲使婦幼到奨善之域。嘗所著八犬伝。亦其一書也。

ここで「勧懲」「奨善」という言葉が初めてみられるが、それがどのように用いられているかというと、「俗談」（作品）

で「衆生」（読者、聴者）の心を魅きつけることを「誘ふ」といい、あるいは知的好奇心を駆き立てることを「醒ます」といっている。それを「昔」の有髪の僧侶が語った法話と「俗談」の関係をもって導き出している。したがってこの「俗談」の背後には法話があるとみてよい。固苦しい法話によって法（真理）を説いたところで衆生は退屈で眠気をもよおすにちがいない。その退屈の眠気を「醒ます」ために衆生の心を「誘ふ」のが「俗談」である。しかしその「俗談」にも教化が求められる。それが「勧懲」「奨善」なのである。その教化の道具として「勧懲」を使い、「婦幼」（一般読者）に「奨善」の心域（心の境位）に到らせるというのである。

ここで語られているのは、まさに坪内逍遥がきびしく批判した「勧善懲悪」と読本の関係そのものである。教化の二次的道具としての「俗談」、しかし「俗談」といえども、人間の生き方の規範となる「勧善懲悪」を教化しなければならない。序言が幕府の支配的イデオロギーに忠実であることは体制の秩序を重んずる時代の思潮（〈法〉の拘束）に従っていよう。それだけに馬琴にとっては〈知〉の拘束であり、文芸・美の伝統からの断絶（不持続）であった。ただそれでも、注意すべきはやはり「誘ふ」「醒ます」の言葉であろう。この序言の論理が伝統を踏襲しているとしても、作者馬琴がいかに「衆生」（＝読者）の好奇心を駆き立て、その好奇心を持続させることに注目しているか、そのことは特筆に価しよう。

高木元は「勧善懲悪」について「むしろ読本の構成上要求された原理で、作者と読者を結ぶ暗黙の約束である。〈仮説〉された理法〉として機能したのではなかろうか。ならばこの原理は因果応報観を介して複雑にからまる長編の作品世界に秩序を与え、文学的にも調和のとれた構成の美を発揮せしめたと考えられるのである。……こうしてみてくると、「悪の活写のための隠れ簑として勧懲を建て前とした」などという解釈は論外としても、読本という伝奇宇宙を創出するに当たって、勧善懲悪は必要欠くべからざる小説原理であったとみることができよう」[8]と述べている。読本の「構成上の原理」が「勧善懲悪」、「因果応報」に基づいていると指摘している点は、きわめて鋭い洞察ということができる。しかしその「原理」が「作者と読者を結ぶ」ものであるとし、それを読者の関心を魅きつけるモチーフとみなしていることも魅力的である。ただし高木はそのモチーフとしての「勧善懲悪」が物語内の筋立や趣向にどのように機能しているかを具体的に分析していない。むしろ、それを「長編の作品世界に秩序を与え」「調和のとれた構成の美」というように、抽象的に捉えているところからすると、「勧善懲悪」を徳目というよりも、美意識とみなし、それが作品の主題・構成（筋立）・場面描写をつらぬいているとして審美的な概念へ転化させようとしているようである。きわめて美学的認識というべきだろうか。

本稿は高木論の「勧善懲悪」が「構成上の原理」であり、「作者と読者を結ぶ暗黙の約束」という指摘に注目する。ただし「構成上の原理」を、読み切りの物語（四、五回位分で小さな完結を与える）を長編化する構成のためのモチーフととらえ、「暗黙の約束」を、作者馬琴と購読者の間に共有される日常的な徳目とみなそうと思う。このように定義を理解し直すことで、「勧善懲悪」は馬琴小説が長編を生成していく「構成上の原理」、すなわちモチーフであることを証明したい。

坪内逍遥以来、「勧善懲悪」は馬琴読本の主題・人物造型・プロットの原理として重く価値づけたが、本稿はたしかにプロットの原理とみなすが、論理的な教化を目的とするものと考えるのではなく、むしろ壮大な馬琴の読本世界を構成するための、小プロットの筋立展開のモチーフと限定したい。

三　歴史物語風の構成

『南総里見八犬伝』はこの題目からわかるように、南総（千葉県房総半島南部）を舞台にした里見氏の八犬士の伝記を描いた小説である。そのことは『八犬伝』の序文および第二輯の再識にも明確に書かれており、作者は前口上のみえともいうべき作品の構想を提示している。このように、序文あるいは物語展開の発端部でこれから展開される筋立を、それも壮大な結構のストーリーを読者に想像させるのは、これから執筆を開始する読本に購読者の興味を惹くためであったろう。いわば商品としての読本の宣伝であった。馬琴はそこでこの作品がどのようなスケールをもつものなのかを語っているが、そこはあくまでも宣伝であって、それがそのまま実際の構想・筋立となるわけではない。のちにもみるように毎回購読者の関心を惹くために新たな趣向や工夫をおこなっている。そこにズレが認められてくるのはしかたのないことである。

高田衛はこの作者自身の言説をとおして、当初馬琴が思い描いていた発端の物語（伏姫の物語）の構想を成立させるために考えた三つの典拠をあげている。[9] 第一は「房総里見関係の軍記・史料の類」、第二は「唐土故事の槃瓠説話」、第三は「水滸伝の発端譚摂取」である。しかしさきほども述べたように、それが馬琴の当初の構想であって、あくまでも宣伝にすぎないことを考慮する必要がある。それゆえに高田はそれに続いて「三典拠が相互に不可欠に、そして自己顕示的に『八犬伝』発端部に結合していることは事実であって、これは今後とも否定されるべくもない。しかし、この事実によって、『八犬伝』原構想の基本的要素を、里見軍記関係、槃瓠説話、『水滸伝』の三系列にのみ、典拠として限定、固執する

必要がはたしてあったであろうか。思えば、いままでの『八犬伝』構想論のすべての呪縛はそこからはじまっていたのである[10]」と指摘している。おそらく高田自身を含めて馬琴研究者が馬琴の言説を真に受けて構想を分析したのであろう。宣伝と商品が異なることはよくあることである。そこで高田による作品そのものの典拠をもっと詳しくみると、『里見軍記』、『房総軍記』、『里見九代記』、『房総志料』などから導いた「玉梓悪霊譚」から伏姫物語へ展開、『太平記』、「犬聟入」民話、「犬祖神話の融合」などによる異類婚姻譚、『日本水滸伝』の影響などが構想と筋立に用いられていることを見出した[11]。

このように馬琴の時代、読本はすでに消費される商品であった。そのためにいかに購読者の好奇心を惹きつけておくかという意識が前口上のみえと実作とのズレを生んだのだ。この高田の指摘は、いままでの定説として認められてきた『八犬伝』の発端部で思い描かれた構想をその三つの典拠だけではなく、作品の物語そのものをも考慮して考えるべきだという教訓であると受け止めたい。こうした注意をもって肇輯の序文をみてみよう。

肇輯五巻は、里見氏の安房に起れるよしを演。亦是唐山演義の書、その趣に擬したれば、軍記と大同小異あり。且狂言綺語をもてし、或は俗語俚諺をまじへ、いと嗚呼しげに綴れるは、固より翫物なればなり。この書第八回、堀内蔵人貞行が、犬懸の里に雛狗を獲たる条より、第十回、義実の息女伏姫が、富山の奥に入る条まで、これ全伝の発端なり。しかれども首尾具足して、全体を闕ことなし。二輯三輯に及ては、八人ンおの〳〵列伝あり。来ん春毎に嗣出して、全体となさんこと、両三年の程になん。

作者は当初、本作品を「唐山演義」に範を取って中国風の「軍記」のようなものを構想し、「狂言綺語」、「俗語俚諺」を利用した「翫物」（遊ぶ物）を書くことをもくろんでいる。この序言からわかることは、この作品が新奇なもので、次々と趣向を仕掛けて読者にあきさせないことを意識しているということである。たとえば同じ軍記でも日本ではなく中国のそれを模倣する。これは購読者が講談・軍談などで軍記の構想は聞き馴れているためである。この〈聞き馴れている〉ということが重要で、購読者の〈知〉の枠組みにスムースに受け入れられるとともに、新奇であるためには中国風の軍記が求められたのである。

また、「全伝の発端」、「首尾」などの小説全体の構成にも注意を注ぎ、「全体をなさんこと」にもこだわっているが、こ

れは、一回一回の読み物として購読者に提供されるという出版形態が二つの点で馬琴に不安を与えていたことを物語っている。すなわち一つは、購読者にあきられることで出版を打ち切られてしまうのではないかということ、いま一つは一回一回の執筆であるために、作者にもまだ「全体」がつかめていないことの不安である。この不安が馬琴に「全体」をこだわらせたとみてよかろう。しかしこの肇輯ではともかくも物語の発端として八犬士を登場させ、二、三輯には「八人の列伝」を描くという全体的な構想が見られる。次は二輯の再識を見てみよう。

この編第二の巻に至りて、伏姫の事尽せり。かゝれば肇輯第十回なる題目は、〔禁を犯して孝徳一婦人をうしなふ。腹を裂て伏姫八犬子を走す。則これなり。〕第十三回たるべきものなり。しかるを前に出せしは、発端いまだ尽さずして、はやく刊行せしゆゑに、その大かたをしらせんとて、物語はいと後なるも、その繡像さへ前にしつ。およそは七巻十四回を、前帙とせまほしかりしに、書肆の好み已ことを得ず、かくて毎編五巻を、年々嗣出す事になん。

ここではまだ発端の物語が終わっていないことをかなり意識していることがうかがえる。その原因は、「書肆（板元・貸本屋）の好み」ことを気にしていることからわかる。書肆は早く主人公の八犬士を登場させることを求めていたのであろう。そのためには伏姫の物語を一挙に終結させなければならない。作者の当初の構想が書肆という商品流通の元を掌握している商業資本の意向によって左右されることをはっきりと物語っている。肇輯での構想とは違って、発端部の伏姫の物語は結局、第二輯七巻十四回で完結させられることになる。

前述した肇輯と二輯の序言をみると、作者は八犬士の登場を物語の発端として意識していた。しかし発端部の物語としての伏姫の物語が作者が考えていたよりも長大となってしまった。早くもズレが生じたのだ。ただ作者からすると、それは全体の『八犬伝』物語の大きな構想のためであり、伏姫の物語のスケールを大きくすることによってこの作品を長編物として展開しようと考えていたことがうかがえる。その最初の構想が一段落した十四回の終わりの部分における作者の記述がそれを示唆している。

作者云、この書、肇輯第一巻より、今この巻に至ては、則一部の小説の開場、八士出現の発端なり。是より次の巻々

は、年月相次ずして、いと後の事に及べり。その間に物語なし。譬ば彼水滸伝に、竜虎山にて洪信等が石碣をひらくの段より、林沖等が出現まで、その間数十年、物語なきがごとし。

本作品は馬琴読本の一つの様式である史伝物と言われている。馬琴は『水滸伝』風の軍記物語を、壮大な歴史仕立ての長編物語として構想していた。伏姫の物語はまさにその発端部であった。書肆の要求でそれを短くせざるをえなかったが、八犬士の物語を大きな歴史の枠組みの中で描こうとする構想は崩していない。

それは作品の中に舞台や事件などの年期からもうかがえよう。肇輯の一回には持氏が関軍管領上杉憲実に攻め立てられて報国寺で切腹した年が「後花園天皇の永享十一年、二月十日のことになん」とあり、里見季基、持氏の恩顧を受けた武士たちが下野国結城の城に籠城をしたのを「永享十一年の春の比より、嘉吉元年の四月まで、籠城三年に及ぶものから、外に援の兵なければ、糧も矢種も竭果ぬ」と詳しく明記していることからわかる。このことはすでにみたように、二輯十四回で伏姫の物語である発端が終わり、十五回から八犬士の列伝がはじまるところにも一貫している。その冒頭部分をみると、

前巻既に説訖る、伏姫富山へ入りにし比は、十六歳のときにして、長禄元年の秋なるべし。又金碗入道、大坊は、嘉吉元年の秋、父考吉が自殺せしとき、既に五歳なりければ、長禄二年富山にて、伏姫自殺の憂に係り、猛に出家入道して、躬を雲水に任しつゝ、斗藪行脚の首途せし、このとき廿二歳になりぬ。……こゝに年序を偻れば、伏姫の事ありて、〻大が行脚の啓行せし、前巻長禄二年より、今文明の季年に至て、無慮二十余年に及べり。この間に犬塚信乃が、未生已前の事を述。この巻亦復嘉吉に起て、文明の比に至れり。

とある。このように本作品は歴史風の筋立で年期を伴っている。八犬士の列伝と里見氏（家）の復興の話が編年体の歴史叙述の方式で記され本作品のストーリーの中心的な構造を担っている。八犬士の話と里見の話とは同筆な価値をもつ。たとえば、この言説の最後で「この間に犬塚信乃が、未生已前の事を述」とあるが、これは「未生已前」の事件とは里見家復興の物語を示唆している。そしてそれに対して「この巻亦復嘉吉に起て」と、ストーリーがフィード・バックを起こす

のは、作者が「八犬士」の物語を始めようとするからである。

この歴史を舞台にした二つの大きなプロット（里見家復興の物語と八犬士の物語）はどのような構成をなしているであろうか。そのことについては第二十回の最後にみられる年期及び列伝の言説が語っている。

いにしへの聖賢、生ながらにして、明智俊才、億万人に傑出す。固より夙恵の列にはあらず。この他の神童又多かり。謝在杭嘗集録して、一編の文采をなせり。今毛挙るに遑あらず。五雑俎中において見るべし。八犬士の如きも、亦これに亜ものか。便是予が戯に、その列伝を作る所以なり。又いふ。蜑崎十郎輝武が溺死は、長禄二年の事なり。又犬川荘助が父、衛二が自殺せしは、それより八年を歴て、寛政六年の事なり。

ストーリーの骨格を構成しているのは編年体で書かれる歴史の興亡である。もちろん、里見家の歴史の興亡という場合、里見家側の者と里見家の再興を阻む者との性格付けにおいて善人と悪人という色分けはしているが、興亡の歴史は明確な善と悪の対立としては展開しない。いうまでもなく歴史と善悪の論理とはレベルの異なるものであって、本質的に歴史（事実）において「勧善懲悪」という思想ははっきりとは捉えなれない。

それにもかかわらず、なぜ本作品は「勧善懲悪」という理論の代表的な作品といわれているのか。これまでの論述で明らかにしてきたように、壮大な筋立の展開としては歴史風の編年体を取っている。しかしその歴史を動かす動因が平凡な人間の理解を超えた歴史の法則だとすれば、読本の購読者（あるいは貸本を共同で楽しむ読者）にとっては、とても難しい物語となってしまう可能性がある。彼ら購読者にしてみれば高遠な人間の法則を知りたいわけではないし、それだけであれば、すぐにあきてそっぽを向いてしまうだろう。彼らは読本が楽しくて彼らでも意味のわかる〈世界〉の物語を望んだのである。作者も板元・貸本屋もそれを期待した。おそらくその〈世界〉は、楽しくてわかりやすい〈世界〉で、そこに意味をもたらすとすれば、一回分で完結するストーリー性を含みもたねばならない。

作者馬琴は読者（それに板元・貸本屋）の要求に応じようとした。それが壮大な歴史仕立ての筋立の中にほぼ一回分で完結するエピソード（＝小物語）を組み入れるという方法だった。そして楽しくてわかりやすい〈世界〉として馬琴が考えたのが「勧善懲悪」だった。その小物語（エピソード）では悪人、善人、両方の戦いなどが重要なストーリーになって

いるからである。この小物語は善が悪を打ち倒す、あるいは悪が滅んで善が生き残るという終わり（結末）によって「勧善懲悪」の教訓（意味）を読者にもたらしてくれる。またそこに献身的な愛・友情・優しさ・死・悲しみといった人間の胸を打つ情的側面が散りばめられているとすれば、小物語はカタルシスの効果を発揮する楽しい読み物となる。実はその「勧善懲悪」をモチーフとする小物語が反復し連鎖することで、長大な歴史仕立ての物語を支えているとすれば、そこに馬琴の長編化構想をとらえることができよう。

そこで本稿では里見家の再興と八犬士の列伝という壮大な構造はひとまず置いて「勧善懲悪」をモチーフとする完結された小物語の分析を主体とする。そこに反復・連鎖を析出することで、購読者に長らく好評を博するような馬琴の読本の方法を見直そうと思う。

四　『八犬伝』の小物語における「勧善懲悪」

『八犬伝』は「輯、冊（巻）、帙、号、套、回」という形式をとっているが、本稿が注目するのは「回」という区切り形式で、ほぼ四、五回位で話を一つの小物語として完結させていることである。すべてがそうというわけでなく、その変形もあるのだが、四、五回程度で完結する小物語をモデルの単位として、そこに「勧善懲悪」のモチーフがつらぬかれているのである。形式そのものは白話小説の影響や、馬琴の時代の商品としての読本、あるいは貸本という出版・享受状況なども大きく絡んでおり、それはまた原稿料で生活を営んだ作者の商売戦略とも関係がある。

『八犬伝』では前節で論じたように、歴史小説風の筋立と「勧善懲悪」をモチーフとする小物語のプロットとが組み合わされることで長編物になっている。その小物語がほぼ四、五回で「始め」、「中間」、「終わり」の完結した構造を持っている。長編の枠組みをもつ歴史小説の中に次々と繰り返されていく完結した話を読者に読み切らせることで購読者の興味を惹くとともに、興味を持続させる効果をもっていることはたしかで、その個々の「読み切り」の構成に、すでに言及した「勧善懲悪」というモチーフが貫かれている。なぜ「勧善懲悪」かということはきわめて大きな近世文学の問題だが、馬琴の時代、改革による出版統制は作者の創作にも大きな影響を与え、幕府の政策に反する創作は禁じられることになった。このような状況の中、「勧善懲悪」という概念はかなり有効な創作方法であり、馬琴は巧みにそれを利用していたの

である。

ここではまずその小物語、すなわち「勧善懲悪」の物語の単位をどのようにとったらよいのかを考えることから論を進めよう。『八犬伝』は里見家の再興をめぐる「八犬士」の列伝とみてよく、歴史小説風のプロットに従って八犬士が次々と登場し、彼らの活躍が重要な筋立を占めている。「八犬士」という善人を単位とするよりも、彼らに立ち向かい、一時は圧倒するものの、結局は倒される悪の存在が指標になるのではなかろうか。この悪の造型から小物語の単位をとらえようとすると、「始め」は悪人の登場、「中間」は悪の悪行・悪事、それによって善人は苦境に陥る。「終わり」は悪人の死・消滅、善人の苦境克服となる。このような悪人を中心においた「始め」、「中間」、「終わり」の構造がはっきりしているところに、むしろ小物語の単位が認められる。そのモチーフはいうまでもなく勧善懲悪である。

『八犬伝』は歴史小説の壮大なスケールの物語の中に、このような「勧善懲悪」の小物語を反復・連鎖させていく。それがどのように具体的に作品内に組み込まれているか、ということを、まずモデル的に析出してみよう。以下に粗筋をもって紹介するのがその一例である。

神余光弘は平群の滝田の城をまかされており、安房の半ばを領地として統治していた。彼は心おごって色と酒にふけ、側女の玉梓という淫婦を寵愛していた。その玉梓は家来の賞罰まで勝手に決めるなどの悪行を、光弘を超えておこなった。そのために、忠臣は去り、玉梓におもねる人物ばかりが残っていた。玉梓には奸智の山下定包という密通の相手がいる。彼は酒宴をよく主催して主君を喜ばせながら主君を殺害して権力を奪おうとまでしていた。その定包の謀略を察していた百姓の朴平と無垢三は悪の張本人定包を討ちとろうとしたが、運わるく主君の光弘を殺してしまう。そのために逆に二人は討ちとられ、その騒動はかえって悪人定包に有利にはたらき、定包は安房の主君になり、滝田の城を玉下城と改名し、玉梓を本妻とするとともに、光弘の妾を全部自分のものにした。折から里見義実は安房に渡ってきて鯉を釣るために毎日川辺に出るが、鯉は釣れず、金碗孝吉というかつての光弘の忠臣に出会うことになる。義実はその孝吉から定包と玉梓の悪行を聞き、挙兵をして滝田の城を攻める計画を立てる。定包が大酒宴を開いていた時、義実の義軍は城の傍まで攻め寄せてきた。あわてて必死に抵抗を続けていた定包の喉を光弘の忠臣の戸五朗が突きさし、鈍平が首を切り落として殺した。引き出された玉梓の美貌にみんなは驚き、義実は必死に助命を求める玉梓を許そうとした。だが、孝吉は主君の命に従わず、彼女の首をはねて殺した。この玉梓の怨念は里見家を長く祟ることになり、その悪念は子孫に纏わるようになった。

（肇輯二回～六回）

この粗筋の中で中心的なストーリーとなっているのが玉梓と定包二人の悪の物語である。まず注目されるのはその叙述量で、これが二回から六回の計五回にわたって語られている点である。次に、この「勧善懲悪」の物語に、里見家再興の主人公義実がからんでいることが指摘できる。これによってこの物語は大きな歴史小説風の物語に組み込まれながらも、一つの話として完結するという形をとっている。また、いま一つ注意されるのは、これが「勧善懲悪」のモチーフを主としながら、そこにさらに仇討ちのモチーフをからませて、物語に一層のサスペンスを与えていることである。

このような様々な構造と趣向をもった物語だが、これが「勧善懲悪」として完結しているということは、すでに述べたように、その作品が「始め」、「中間」、「終わり」の部分をもっているということである。善人と悪人の造型が最初から固定していて、筋立をわかりやすくさせていることも指摘しておこう。

玉梓は「淫婦」として、定包は「奸智」、「淫楽」などの悪人として最初から悪人の造型を固定化されている。

光弘は、こゝろ驕りて色を好み、酒に酖りて飽ことなく、側室媵妾多かる中に、玉梓といふ淫婦を寵愛して、内外の賞罰さへ、渠に問て沙汰せしかば、玉梓に賄賂ものは、罪あるも賞せられ、玉梓に媚ざれば、功あるも用られず。是より家則いたく乱れて、良臣は退き去り、佞人は時を得たり。……柵左衛門定包は、陽に行状を慎て、陰に奸智を逞し、営利を謀る癖者なれば、初より玉梓に、佞媚ずといふことなく、渠が好む物としいへば、価を厭ず贈る程に、漸々に出頭して、口才主君を歓せ、酒醼を催し、淫楽を勧め、剰玉梓と密通して、尾陋の挙動多かりけれども、光弘は露ばかりもこれを暁らず、いく程もなく定包を、老臣の上にをらせ、藩屏の賞罰大小となく、皆任用たりければ、その権山下一人に帰して、主君はあるもなきが如し。（肇輯二回）

次は毒婦玉梓の小物語の「終わり」の部分で、悪人に対する残酷な懲悪になっている。

「物ないはせそ、牽立よ。」と金碗が令を受、雑兵四五人ン立かゝりて、罵り狂ふ玉梓を、外面へ牽出し、軈て首を刎たりける。かゝりし程に八郎は、更に仰を承りて、賊主定包・玉梓等、鈍平・戸五郎が頸もろ共に、滝田の城下に殺

梟たり。現積悪の報ふ所、斯あるべきことながら、今更にめざましとて、観るもの日毎に堵の如し。（肇輯六回）

このように「勧善懲悪」を主題とする小物語は毒婦・淫婦と、その相手の男を悪人として設定している。つまり悪人夫婦という二人の悪の組み合わせを利用している。毒婦・淫婦、悪人夫婦という悪の造型は本作品の特徴的なパターンであることがわかろう。それは大塚匠作の娘である亀篠を淫婦とし、相手の蟇六とともに悪人夫婦として登場させている点にもみられる。

大塚匠作が女児亀篠は、前妻の子なりしかば、番作には異母の姉にはあれど、心ざま、父にも弟にも似ざるものにて、親同胞の寵城を、想像る気色もなく、況いて継母の千辛万苦を、露ばかりも念とせで、生こゝろつきし此より、結髪化粧に、春の日を長しとせず、情郎としのびあふ日は、秋の夕を、短しとせる、嗚呼の淫婦なりといへども、生ぬなかとて母親は、仂なくこれを懲さず、傍いたく思ふのみ、いとゞ多病になりにけり。されば亀篠は、同郷なる、弥々山蟇六といふ破落戸と、ふかく契りて、その情鰾膠もて接たるごとく、皮なくば君とわれ、比日連理に身をなして、霎時もほとりを離れじ、と思ふ心は日にまして……。（第二輯第十六回）

亀篠と蟇六は始めて登場する八犬士の犬塚信乃と名剣の村雨丸をめぐって対立する悪人である。偽物の村雨丸を渡された悪人宮六に殺されるが、宮六も蟇六の下男であった犬川荘助（額蔵）に殺される。犬塚信乃と犬川荘助という二人の八犬士の列伝に、亀篠と蟇六という悪人の話が絡み合っているのがうかがえる。このように『八犬伝』は、善人の歴史風の列伝と悪人が中心になる「勧善懲悪」をモチーフとした小物語が組み合わされた構造をもって長編化している。

おわりに

坪内逍遥は『八犬伝』の「勧善懲悪」を批判し、近代文学への移動を目指していた。その結果、馬琴読本における「勧善懲悪」は江戸時代までの前近代的なものとしてみられることが一般的になった。だが、本稿では、その「勧善懲悪」を

倫理、思想ではなく、作品構成の重要なモチーフとして捉えた。その「勧善懲悪」をモチーフとした小物語が反復と連鎖している。

『八犬伝』は、近世の書物流通経済（書物の商品性、商業出版機構の発展）にも深く関連して、一冊二回ほどの読み切り形式を定着させている。この読み切り形式を考慮し、完結した物語として販売するため馬琴は「勧善懲悪」というモチーフを利用したのである。この「勧善懲悪」をモチーフにした多数の小物語と「八犬士」の歴史風の列伝という構成方法が絡み合って長編作品になっていく。また、本作品の悪人の造型は様々であるが、本稿では毒婦・淫婦、悪人夫婦を中心において考察してみた。

【注】

本論文に引用したテクストは小池藤五郎校訂『南総里見八犬伝』（岩波書店、一九八四～一九八五年）による。

(1) 中村幸彦「滝沢馬琴の小説観」『日本文学研究資料業書　馬琴』有精堂、一九七四年、八六頁。
(2) 青木稔弥「明治の曲亭馬琴」『週刊朝日百科　世界の文学八八　南総里見八犬伝』朝日新聞社、二〇〇一年、九二四七頁。
(3) 中野三敏「小説神髄再読」『日本近代文学第六五集』日本近代文学会、二〇〇一年十月、二二九頁。
(4) 中村完・梅澤宣夫『日本近代文学大系第三巻　坪内逍遙集』角川書店、一九七四年、四一頁。
(5) 同上、五一頁。
(6) 同上、五九頁。
(7) 同上、七〇頁。
(8) 高木元「勧善懲悪」『研究資料日本古典文学　第四巻　近世小説』明治書院、一九八三年、三六二頁。
(9) 高田衛『江戸文学の虚構と刑象』森話社、二〇〇一年、二〇二頁。
(10) 同上、二〇二～二〇三頁。
(11) 『完本八犬伝の世界』では『八犬伝』の典拠がくわしく論じられている（高田衛『完本八犬伝の世界』筑摩書房、二〇〇五年）。